



Title	台湾に渡った歌舞伎役者たち : 「台北役者評判記」による
Author(s)	日置, 貴之
Citation	JSPS科研費「日本統治下台湾における歌舞伎・浄瑠璃を中心とする諸芸能興行研究」23K00117 研究成果報告書. 2026, p. 72-83
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/104310
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

4 台湾に渡った歌舞伎役者たち —— 「台北役者評判記」による ——

日置 貴之

一、はじめに

日本による台湾の統治は、明治二八年（一八九五）四月一七日から昭和二〇年（一九四五）一〇月二五日まで約五十年に及んだ。この時期の台湾における演劇については、石婉舜氏、李宛儒氏、陳怡如氏、問ふさ子氏らによって、近代劇の成立や台湾総督府の文化政策などの観点から論じられている¹。日本古典演劇・芸能の台湾における受容という観点では、王冬蘭氏が日本統治下の台湾における能楽の受容について論じ、当時台湾に居住した日本人たちが能楽を愛好したことを明らかにしている²。台湾に渡った人々によって親しまれたのは、能楽だけではなく歌舞伎もまた、日本による台湾統治開始後、間もない時期から、台北などの都市で興行されていた。本稿では、新たな劇場が誕生するなど、台北における歌舞伎が隆盛を迎えた明治三六年（一九〇三）に、現地紙『台湾日日新報』に連載された「台北役者評判記」³に注目し、当時の台湾で歌舞伎を演じたのはいったい役者たちであったかを見ていきたい。

二、「台北役者評判記」連載の経緯

『台湾日日新報』は、『台湾新報』『台湾日報』が合併して、明治三一年（一八九八）五月に創刊された日本語

紙であり、台湾総督府による出資を受けた実質的な機関紙であった。昭和十九年（一九四四）に他紙と統合され、『台湾新報』となるまで、日本統治時代の大部分にわたって刊行された、日本統治期台湾最大の新聞である。

同紙には、台湾における演劇の記事も少なからず見え、そこには劇評も含まれる。管見の限りでは、『台湾日日新報』に掲載された本格的な劇評としてもっとも早いものは、明治三十三年（一九〇〇）七月一五日の「十字館の劇評」である。その後、同紙における劇評記事は、明治三五年（一九〇二）後半以降に目立って増加し、三六年（一九〇三）一月二日から二月十八日まで、観劇団体「陸連」に關係したと思われる八人の評者の合評という形式⁴の「台北役者評判記」が連載される。これには、台北における劇場の充実と役者の新規来台が影響している。そうした事情は、「台北役者評判記」の第一回「はしがき」において説明されている。少々長くなるが、以下に引用しておく（傍線は引用者による）。

●台北役者評判記（一）

はしがき 眼兵衛

榮座 台北座

台北に芝居と云ふものが出来たのは随分早い時分で其頃はホンの一時の蕤張小屋でガタヒシ演つた事もあつたが^①卅年の冬に西門外街の魚市場の辺に台北座と云ふ一寸小屋らしいものが初めて出来成駒一座愛沢一座杯で打つた事もあつたけれどもまだ其頃は軍政が民政に改つて間も無い時分で名は演劇であるが宛然で田舎の神事に一夜興行する素人芝居同様全で見られたものでは無かつた^②其後興行小屋の十字屋が十字館と改め鈍帳にもしろ九州役者を輸入して少しく芝居らしくなり夫れが追々進歩して相当な役者が来る様にな

り一昨年今の台北座が建築せられた後は双方共一時に面目を改め互ひに競争をして役者を買ひ込み去年一月の初芝居の如きは十字館に紅粉助、瀧三郎（今のは別人）吉太郎あり台北座には竹三郎、雷次郎、他之助杯にて時々同一の世界を出して各々得意の腕を磨き湾的好劇家の咽を鳴らさせ橋五郎、彦三郎等の来て弥々其価値を上げ台湾の芝居などと余り馬鹿にして呉れるなど威張つた事もあつたが今から思へば実にお耻しい次第であつた処が③十字館は劇場取締規則の爲めに倒れ暫時は台北座の独舞台であつた処爰に榮座と云ふ大劇場が出来し我久蔵、雀之丞、彦三郎等の外に台北座の橋五郎を買収して一揉に台北座を圧倒せんと試みたので台北座は之れに反抗し非常な奮発を以て瀧之助を聘んで江戸風の旗幟を翻へし反つて榮座を倒さんとするの氣勢を見せ双方競争の態度となり今春よりは榮座に瀧三郎一派の数名を増して益々上方風の嗜好に客を引かんとすれば台北座は更らに多賀之丞、卯多三郎等を加へて其向ふを張り競争は弥々劇烈となつたと共に劇界の進歩は驚く可き速度を以て進み之を過去一年の去年の一月と比較すれば恰も丹波ヒヨッコ谷から一時に都会に飛び出した様な観がある左れば④今春以来の芝居熱と云ふものは台北市中の人氣を此一方に引寄せたために花街や料理屋までが影響を蒙つたと云ふ浮かされば方は実に前古未曾有と云つても不可なしである「後略」

（眼兵衛「台北役者評判記（一）はしがき」明治三十六年一月二十一日）

この記事によれば、明治二八年（一八九五）四月一七日の台湾割譲後、①三〇年（一八九七）冬に「西門外街の魚市場」付近に台北座という劇場が開場し、歌舞伎興行が始まった（それ以前にも仮設劇場による興行は行われていたようである）。②その後、先の劇評で取り上げられていた十字館が歌舞伎興行を始め、九州方面を中心

に内地から役者が渡台するようになり、その質も向上していった。そして、台北座が新築開場すると、台北座・十字館の対抗時代となった。③しかし、十字館が劇場取締規則による取り締まりで興行を継続できなくなり、台北座の一人勝ち状態となったところへ新たに栄座が開場し、栄座は上方（関西）風、台北座は江戸（東京）風を打ち出している競争が繰り広げられた。④そして、その結果、三六年（一九〇三）に入るころには、花街や料亭をも巻き込んだ歌舞伎への熱狂状態が発生したという。

当時の新聞記事、しかも、おそらく劇界に強く肩入れした人物による投稿であることを考慮すれば、多少の誇張はあると思われるが、それでも日本による台湾統治開始以来、あるいはこれ以降、昭和二〇年（一九四五）の日本による統治の終了までを見ても、この明治三六年（一九〇三）という年が、台湾における歌舞伎がもつとも盛り上がりを見せた年であったことは事実であろう。

なお、右で触れた劇場の所在地、開場時期について、「臺灣老戲院文史地圖（1895-1945）」⁵⁶および『台湾日日新報』の記事等の情報に基づいて簡単に補足しておく。台北座は現在の台北市萬華区内江街六三番地付近に所在、明治三〇年一二月開場、三四年に新築開場。十字館は現在の台北市中正区博愛路七七番地付近で、当初は十字屋として演芸興行等をおこなっていた。栄座は現在の台北市萬華区漢中街五二番地（UNIQLO西門店）付近で、三五年（一九〇二）一〇月に開場した。

『台湾日日新報』にも開場直後から栄座の興行に関する記事が多数掲載されており、「台北役者評判記」はこうした流れを踏まえ、年が明けた三六年（一九〇三）一月に連載を始めたのである。「眼兵衛」という人物の筆による「はしがき」をさらに見ていくと、台北座・栄座の競合により芝居熱が高まる中で、特に芝居を好む仲間内で、「何なんと一番此連中で役者評判記を作らうぢやないかと出来心で云いつたが実ものになり此奴は奇妙な趣

向だと追々賛成者の数が増えて以上八人思つた存分四辺あたり構かまはずの云ひ体三昧八人八色の評判記弥々明日の紙上より読者にお目通りする事となつた。そして、台北・栄の両座から特に十名ずつの役者を選び、一人ひとりに評を加えていくこととしたというのである。

三、「台北役者評判記」に取り上げられた役者

「台北役者評判記」で取り上げられた役者の出演劇場、評の内容からわかる來台時期等を掲載日順に示すと表のようになる。役者に関する評文からわかることをいくつか見ていきたい（なお、役者には掲載順に番号を振つた）。

(1) 芸風・容姿等

『台北役者評判記』の役者評では、

(九老人) 色立役としては色気乏しく、心棒立役にしては軽し、先づ適り役は帯屋の長右衛門、研屋才一郎と云ふあたりで入りませう、左れば先達ての三浦の助杯は善く出来ました、兎に角旅役者としては重宝な仁です、前髪ものや女形杯はととも柄にはいけません、台詞の言ひ廻しに何役を勤めても少しも変化の無いは大なる欠点でござませう

(1) 嵐彦三郎評

(手爾波) 厭味といふものは頭の螺旋から足の爪先まで無い役者なれど、口跡は入歯の為か咽喉の奥から出

て来るやうで、聞くからにオホンと一ツ痰が取つてやりたい気がする、殊に本業の足渉りは乱舞の力が与かつて居る故か、男はちいさいが舞台が大きい、〔後略〕

② 阪東竹三郎評

といった評に端的に表れている通り、まず歌舞伎の伝統的な役柄の類型に対する適性、台詞回しや口跡といった要素に対する言及が非常に目立つ。歌舞伎役者に対する評価の仕方としては、非常に伝統的な態度といえよう。

また、

(百文字屋) 目立つ程のデボチンではあるが、年の若い故で顔が艶々して居る処へ、白粉附きが至極宜しいから、震ひつく程奇麗な事く、〔後略〕

③ 中村吉十郎評

(黙庵) 片眼が義眼だそうなが気の毒なものでござ眼が利かぬのは尤もく、是で眼が利いたらウント引立つでがしよう、〔後略〕

⑬ 阪東五郎評

といった評のように役者の具体的な身体的特徴に関する言及が見られるのも、一人ひとりの役者に対する具体的な印象を喚起するものとして興味深い。

(2) 来台時期

取り上げられた二〇名の役者のうち一三名について、来台時期に関する記述があることは特徴的である。役者

と同様に、基本的には割譲後に内地から渡台した人々であったと考えられる観客たちにとって、役者の来台時期は興味を惹く情報だったのであろうか。

また、「十字館時代には相応に見られ、随分提灯持を仕てやった事もあつたが、栄座へ入つてからは舞台負がしてサツパリ物に成らず、義理にも褒められない」(①嵐徳三郎評)、「十字館台北座時代とは打つて変つて、何処で修業をせられたやら、栄座へ出てからメツキり器量を上げられました、其上見る度く上達して居るのは優斗りで△います」(⑨中村岡之助評)、「近来滅切り白詞廻しも改め、又訛りも次第に脱けて、もと十字館へ来た当時とは宛然別人物になつたやうだ」(⑩臺家蓄花評)といった評からは、いまだ台北における歌舞伎興行が開始されて七、八年といったこの時期にすでに継続的に役者の芸を鑑賞し、その変化を論じるような観客の共同体が生まれつつあつたことが窺える。

(3) 内地での芸歴等

演劇史的な観点でいえば、「台北役者評判記」でもっとも目を引くのは、台北の劇場に出演している役者たちが内地ではどのような位置付けであつたかを、ある程度知ることができるといふ点であろう。彼らの多くは、「優は古い頃中島座にて見た事がありました、其後は旅廻りのみして居つたものならん」(⑬阪東五郎評)というように、大都市の格としてはそれほど高くない劇場(中島座は小芝居を前身とする東京の劇場)や旅芝居に出演していた役者とみられ、「未だ大阪を知らない」と云ふ(⑩臺家蓄花評)、すなわち旅芝居専門の者も含まれた。地域的には、「九州一の三枚目と云ふ振れ込み」であつたという⑭片岡扇平のように、関西から九州方面で活動していた者が多いようである。

もちろん、中には内地でもある程度の活躍を見せていたと思われる役者もおり、

(黙庵) 何しろ年齢が七十四と云ふのだから驚きやす、能く台湾まで来たものがすよ、此人は三四年前であつたらう、大阪で一生のお名残を演つた事があると覚えてる、其時は早天王寺か何処か其辺へ隠居して居つたのであるが、再びお名残狂言の為に道頓堀で花を咲かせた、其時代我輩今程芝居狂で無かつた上、大阪に居なかつたので、何を演つたか能く覚えては居やせんが、其人ならば其時の新聞の評は余程良かった様に頭に残つて居る、夫は大阪でも有名なものでござす、「後略」

(4) 中村駒右衛門評)

といった評からはそのことが窺える。特に、(20)市川瀧之助は、名優初代市川左團次の門弟として厚遇されていた様子が窺え、(18)片岡我久蔵も「大松島屋」(一代目片岡仁左衛門か)の高弟という触れ込みで期待されていたらしい。

その瀧之助の評には、「左團次の弟子だけに万事が高島屋張り、思ひ入れに口跡など能く似て居る、「中略」大舞台で見たいが、台湾では台北座より外は師匠から封じられて居るといふ話」とあるが、これは師の目の届かない外地で、芸が荒れることを案じての制約であろう。こうした例とは逆に、(11)尾上多賀之丞の場合は、「原の名是多賀次郎、台湾では尾上多賀之丞と名乗る丈の腕前はたしかにある」とあり、台湾限定で多賀之丞を名乗つたようにも読める。現在二代目とされる多賀之丞は明治三三年(一八九九)に没しており、三代目は市川鬼丸が昭和二年(一九二七)に襲名する。二代目と三代目の間にも「多賀之丞」が存在したようである。坂東竹三郎も幕末の名優五代目彦三郎の前名であるが、(2)坂東竹三郎はそれを正式に襲名したわけでも、血縁や芸系の上で

の強い関係があるわけでもない。こうした「地域限定」での名乗りや怪しげな「襲名」を、今日の視点から単純に「偽物」と切り捨てるのではなく、地方や外地の観客がどのように歌舞伎を楽しんだのかという観点から検討していく必要があるであろう。

(4) 私生活等

そうした意味では、「台北役者評判記」にしばしば役者の私生活に関する言及が見られることも興味深い。「特に注意して遣りたいのは、向ッ歯が一本抜けて居る事で、是が非常の眼障りになつてならぬ、少し艦舩通ひを止めて義歯をするがよい、商売の元入れた」(⑦中村駒之丞評、「艦舩」には当時遊廓が立地)といったお節介や、「聞けば二三日前から病気で台北医院へ入院せられたとやら」、「吾妻から送つた引幕の肩に贈と云ふ印が書いてあるが」(⑱市川瀧三郎)といった評からは、役者の一挙手一投足に注目し、単に観劇をするだけでなく引幕を贈呈するなど(吾妻は当時台北駅前にあつた料亭・旅館)、積極的に芝居に関わっていく観客の姿が浮かび上がってくる。

四、おわりに

以上、『台北役者評判記』からわかる、明治三六年(一九〇三)当時の台北で歌舞伎を演じていた歌舞伎役者たちに関する情報を簡単に見てきた。台北座と栄座の競合の中で、内地において一流とは言えないまでも、それなりの力を持った役者たちが新たに台湾に渡り、また台湾における歌舞伎興行の最初期から台湾に根付いていた役者たちも活動を続けていた。観客はそうした役者の一人ひとりに注目し、継続的に舞台を追いかけるだけな

く、その私生活にも関心を向けていた。

もつとも、こうした歌舞伎に対する熱狂は長くは続かなかつた。明治三十七年以降は、歌舞伎よりも新派の興行が目立つようになるのであり、その後は内地における旅興行同様に、一座が短期間滞在して、次々と演目を変えながら興行をしていく形態が基本になっていく。その結果、大正二年（一九一三）の一五代目市村羽左衛門、昭和期の二代目市川右團次、七代目澤村宗十郎、中村扇雀（二代目鷹治郎）など、東京や大阪でも一流の役者の來台も実現するのであるが、彼らはあくまでも「旅」にやってきたスターなのであって、「早く内地へ帰つて怠らず勉強が肝要ですが、こんな処でヤレ甘いとか、エライとか言のを嬉しがつて鼻に掛る様では到底駄目」（③中村吉十郎評）などというようなやや屈折した愛着の対象となり得る存在ではなかつただろう。

「台北役者評判記」については、本来であれば、評を寄せた評者たちについても言及すべきであるし、台湾における歌舞伎興行の歴史の全貌についても明らかにしていく必要があるが、それらについては今後の課題としたい。

表 「台北役者評判記」掲載俳優一覧

掲載日	役者	劇場	來台時期	備考
1月22日	①嵐彦三郎	栄座	十時館時代	
1月23日	②阪東竹三郎	台北座	十時館時代	現在代数外。
1月24日	③中村吉十郎	栄座	明治36年初め	①9市川瀧三郎の子。
1月25日	④中村駒右衛門	台北座		

2月15日	⑮片岡我久蔵	栄座	明治35年後半	十一代目仁左衛門（当時、我當）門下か。
2月14日	⑰尾上卯多三郎	台北座		「丈は大阪角の芝居辺にて生れた人だそうだが」「聞けば金城の末広座とやらで好ひ顔で有つたさうな」「阪東簀助座頭で書出しを永らく演て居た」。
2月11日	⑯阪東五郎	栄座		「栄座では老人株の一人」「優は古い頃中島座にて見た事がありました。其後は旅廻りのみして居つたものならん。
2月10日	⑮山下三勝	台北座		「台北座では随分久しい以前からのお馴染」。
2月8日	⑭片岡扇平	栄座		「九州一の三枚目と云ふ触れ込み丈けに今栄座の福の神」。
2月6日	⑬実川八百七	台北座	明治35年	「昨年八百三郎等一派と共に乗り込んで来た今台北座での老人株」。
2月5日	⑫嵐雀之丞	栄座		
2月4日	⑪尾上多賀之丞	台北座		「現代数外。二代目多賀之丞門下か。「原の名は多賀次郎。台湾では尾上多賀之丞と名乗る」。
2月3日	⑩臺家薔花	台北座	十時館時代	「未だ大阪を知らない」と云ふ役者にしては感心でござす」とあり、内地では旅回り専門か。
2月1日	⑨中村岡之助	栄座	十時館時代	「栄座の連中では此文が一番当地への古参」。
1月30日	⑧中村扇三郎	台北座	明治36年初め	
1月29日	⑦中村駒之丞	栄座	明治35年後半	
1月28日	⑥阪東のし蔵	台北座	明治36年初め	
1月27日	⑤実川百々蔵	栄座	明治36年初め	

2月17日	⑲市川瀧三郎	栄座	明治36年初め	吾妻（台北駅前）の料亭から引幕が贈られたという。「生粋の上方役者今栄座の座頭として足元差出しまで許されて居ると云ふ大立者」。
2月18日	⑳市川瀧之助	台北座	明治35年後半	初代市川左團次門下。「台北座よりほかは師匠から封じられている」。

¹ 石婉舜「台湾新演劇運動の黎明」の到来——1943年、厚生演劇研究会の設立と公演（藤井省三ほか編『台湾の「大東亜戦争」』東京大学出版会、二〇〇二年）、李宛儒「日本統治下の台湾における演劇取締制度および近代劇の出現」（伊藤裕夫・藤井慎太郎編『芸術と環境 劇場制度・国際交流・文化政策』論創社、二〇〇二年）、陳怡如「台湾における興行取締規則の制定と実施——皇民化運動期以前の大衆演劇活動からの考察——」（『文化政策研究』二二、二〇一八年）、間ふさ子「戦時下台湾における近代演劇」（神山彰編『戦時下の演劇 国策劇・外地・収容所』森話社、二〇一三年）など。

² 王冬蘭「日本統治下台湾における能舞台」（『藝能史研究』二二七、二〇一九年十月）、「桂六平と能楽雑誌『能海』 植民地台湾における能楽の一考察」（『演劇学論叢』一九、二〇一〇年三月）。

³ 全文の翻刻は拙稿「明治三十六年「台北役者評判記」（一・二）」『明治大学教養論集』五五七・五六〇号、二〇二一年九・十二月に紹介している。
⁴ 合評形式は江戸時代の役者評判記以来の伝統であるが、架空の評者ではなく実在の観客からの投稿をも募りつつ、観劇団体が編集をおこなうというスタイルは、明治一〇年代に東京で刊行された六二連の『俳優評判記』に做ったものといえる。

⁵ 中央研究院人文社中心GIS專題中心暨國立清華大學臺灣文學研究所石婉舜研究室「臺灣老戲院文史地圖（1895-1945）」<http://mapnet.tw/theater/>（二〇一五年十二月一〇日アクセス）。

⁶ ただし、この評で触れられている駒右衛門の大阪での舞台については特定できていない。

⁷ 国立劇場調査記録課編『歌舞伎俳優名跡便覧「第五次修訂版」』（日本芸術文化振興会、二〇二〇年）では、二代目と三代目の間に二名「代数外」の多賀之丞を記載しているが、「台北役者評判記」に見える多賀之丞はこの二人とも別人であると思われる。